

～株式投資で勝つ方法～ - エライ人の金言編 -  
その3 ジム・ロジャーズに学ぶ

2005/07/01 太田寿一

第1回 去年、TBSの「儲かりマンデー！（現がっちりマンデー！）」に出てた人

（1）冒険投資家以前

ジム・ロジャーズは1942年にアラバマ州デスポリスという小さな町で生まれました。家は貧しく、幼い頃から野球場で空き瓶を拾ったりピーナッツを売ったりしてお金を稼いでいました。その後奨学金を得てエール大学に進学、さらに卒業後オックスフォード大学に進み、政治・哲学・経済を学びます。ジムはオックスフォードを出た後2年間の軍役を経て、ウォール街のブレイシュローダー証券で働き始めます。そしてこのブレイシュローダー証券にいたのが、当時頭角を現しつつあった現代の錬金術師ジョージ・ソロスです。

意気投合した2人は1973年に独立して「ソロスファンド」を設立、後にクオンタムファンドと呼ばれるこのファンドは、1980年まで一度も損失を出した年を出したことがなく、1200万ドルだった資産も10年程度で2億8,000万ドルにまで成長していました（年利にすると3,000%以上！！！！）。

しかしファンドの資産が増加するにつれ、組織は大きくなっていきました。元々人付き合いの苦手だったジムはこのことに否定的で、1980年には1400万ドルの取り分と共にファンドを去り、引退しました。ちなみにソロスは、ファンドの後継者にジムのどうしても指名したかったそうですが…。後にクオンタムファンドはジム・マルケスやスタンレー・ドラッケンミラーなどの優秀なファンドマネージャーを引き込みますが、神であるソロスに及ばない彼らの運用は上手いかず、2000年のITバブル崩壊を受けてファンドは収縮を余儀なくされたそうです。

（2）2度の世界一周

ビジネスの第一線から引退したジムは、念願だった世界一周旅行に出かけます。1回目は1990年3月～1991年11月にかけてオートバイで、2回目は1999年1月～2002年12月にかけて黄色の特注ベンツで行い、アジア・アフリカ・ヨーロッパ・南米など様々な国を旅し、「これから経済が成長する国」を探しました。

彼の国際投資に関するスタンスは、成長する個別株ではなく成長する国に投資するというやり方です。即ちその国が伸びそうだと考えると、その国のあらゆる株式を買うという方法なのです。以下、ジムの投資方法について触れてみたいと思います。

ジムの投資講座（各国についてのレポートは、1999年時点のもの）

1、時代を先読みする

→ **真っ先に変化を見出すこと**。人が気付いてから投資するのでは手遅れである。誰よりも先に変化に気付かなければならない。そのためには自分の足で直接現場に行って調査して、自分の感覚で判断すること。

→ **判断の材料の中に政府の関与があるかどうか**。政府の介入により、産業が大きく変わることもあるので見逃してはならない。個々の会社の利益の伸びを見るより、その業界や国の社会的・経済的・政治的要因の影響という大きな流れを見ること。細かい景気変動にとらわれず長期的・構造的な「世界の流れ」で考えると予測は正確になってくる。

## 2、トルコについて

→トルコは若い人が多く、EUに加盟すれば年老いたヨーロッパを支えることが出来る。他に、中央アジアの共産主義が崩壊したことにより、東の国境方向に新しい成長市場を持つことが出来たというトルコ独特の地理的な利点もある。

## 3、中国について

→中国が厳密な共産主義だったのは1949年から1979年のほんの30年に過ぎず、それ以前は貿易が盛んで、アジア最大の証券取引所があり世界でも有数の資本主義国家だった。また華僑の強力な国際的ネットワークも見逃してはならない。ただ現段階では共産党が政権を握っていて、農業などの保護政策も強く、ひとりっ子政策の弊害（甘やかされて育った）などもある。

## 4、アフリカの通貨政策について

→アフリカ諸国は独立した際、2つの通貨政策を行った。1つはつながりを重視したフランス式で、これらの国はアフリカ金融共同体フラン(CFA)を使用、それにより通貨は安定した。もう1つのイギリス式は、各国が中央銀行をつくって自由通貨を発行するタイプで、財政が厳しいときには通貨を乱発するという安易な方法を行った。その結果多くの国の通貨が暴落した。

## 5、投資で成功するには、自分が完全に理解しているものに投資すること

## 6、南米の通貨政策について

→1970年代から80年代にかけて、軍の独裁によるヘタな経済運営が行われた。その後国際貿易がうまくいき始めると、権力を維持する楽な方法＝通貨の乱発と借金、これにより90年代にはアルゼンチンをはじめとして経済崩壊が起こった。

## 7、メキシコについて

→メキシコは世界第7位の産油国であり、アメリカ経済の好調に支えられて20世紀の終わりにはGDPが年率6.9%の成長を遂げた。しかしアメリカ経済が停滞すると、アメリカに90%の輸出を行っているメキシコも打撃を受けた。それに加え石油の枯渇が進み、産出量は半減している。またメキシコは石油の精製事業を拡大したり、油田開発を行ったりしていない。加えて平均年齢が若い国であるから、国内消費だけでかなり無くなってしまうだろう。

## 8、多くの人が犯す過ち

→一度成功してしまうと、自分のことを天才だと錯覚してしまう。放漫になったときは頭が冷えるまでじっとしていた方がよい。**絶好のチャンスとはしょっちゅうあるわけではない**。うまくいった後は冷静になるまで投資してはならない。

## 9、情報の取り方

→広い視野で世界を見られるように、海外の情報は現地のラジオを聞いたりして、間に挟むものを極力避ける。また多くの国の政府は会計方法を変えたりして数字を誤魔化している。さらに誤った金融政策を行い、下げ相場の被害を更に大きくしたりしている。情報はできるだけ一元的なものを入れるようにする。

### エライ人の金言コーナー

- ・混乱した国がやることは、まずインフレで、その先は戦争である  
(アーネスト・ヘミングウェイ)
- ・ほとんどの飢餓は、食料不足ではなく政府の落ち度で起こされる  
(アマルティア・セン)

### 久々の蘊蓄コーナー

- ・ジム・ロジャーズは、ソロスファンド時代はものすごいハードワーカーで、そのため何度か離婚を経験している。最初の旅に出たとき一緒だった彼女は彼より30歳以上年下で、当初は大学講師と生徒という関係だった。今は別の女性と結婚している。ちなみに盟友ジョージ・ソロスが52歳のときに再婚した2人目の奥さんも20歳以上年下だったりする。
- ・現在ジムには娘がいるが、中国人のメイドを雇って彼女に中国語を教えているそうだ。「21世紀は中国の世紀」ということを考えてのことらしい。

参考文献 『冒険投資家ジム・ロジャーズ 世界バイク紀行』(2004)

ジム・ロジャーズ(著) 林康史・林則行(訳) 日本経済新聞社

『マネーマスターズ列伝~大投資家たちはこうして生まれた』(2000)

ジョン・トレイン(著) 坐古義之・臼杵元春(訳) 日本経済新聞社

『マンガ ジム・ロジャーズ』(2005)

森生文乃(著) パンローリング